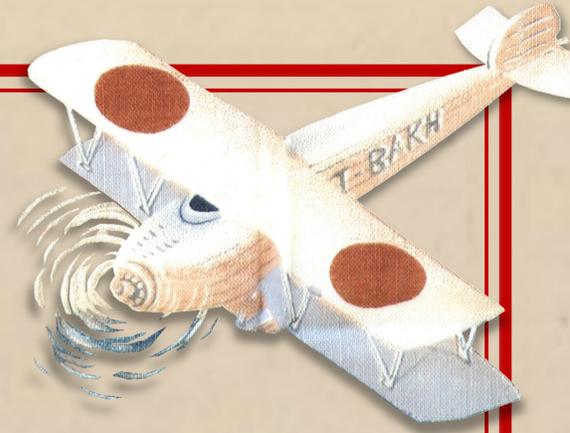


戦争柄の着物



明治27年(1894)の日清戦争から、太平洋戦争開戦後の昭和17年(1942)頃まで、近代の戦争に関する意匠が用いられた着物や帯、襦袢、羽裏などが盛んにつくられました。

日清戦争や日露戦争では、戦艦や大砲などの意匠を用いた羽裏や襦袢がつくられ、主に裕福な男性や花柳界の女性の間で流行しました。

大正時代になると、玩具や乗り物が表された文様(ボンチ柄)が誕生し、戦争柄もその一環として男児向けの祝い着に用いられました。男の子が軍人として出世してほしいという願いがこめられた、吉祥柄でした。

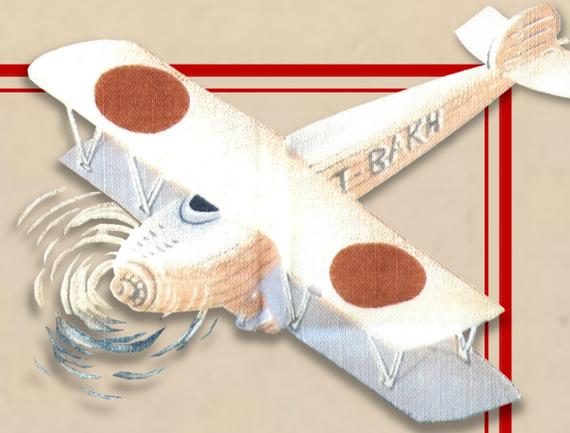
大正・昭和期には、近代兵器の進化に伴い、飛行機や戦車、空母、戦闘機などが描かれるようになります。

当館に寄贈された戦争柄着物の端裂には、飛行機や戦艦が旭日旗、海軍大臣旗などが描かれています。戦艦には屈曲煙突が描かれており、アジア・太平洋戦争を通じて日本海軍の象徴となる戦艦「長門」だとわかります。兵器が明るく楽しい道具として描かれる戦争柄は、プロパガンダとして作られたものではなく、社会が求めたものでした。



▲ 端裂に描かれた戦艦「長門」

ラジオと戦争



大正14年(1925)3月22日、ラジオ放送が開始されました。昭和3年(1928)には、昭和天皇即位の御大典記念事業として「ラジオ体操」が始まりました。「ラジオ体操」の普及は、日本に住んでいた人たちが同じ時間に同じ動きを行うことで、身体的・時間的に国民化が進んだといわれます。

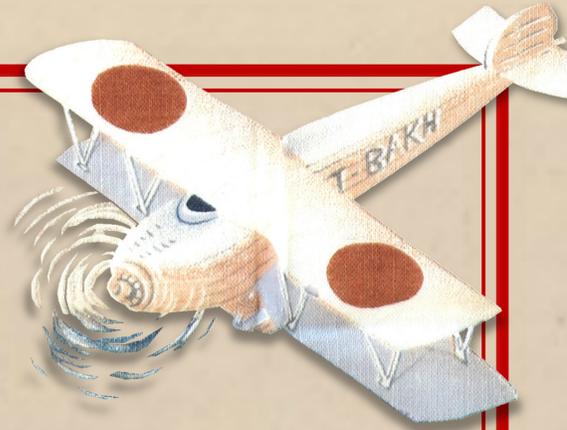
昭和13~15年(1938~40)頃には一般への受信機の販売が始まり、ラジオが普及していきました。袋井市域にも昭和13年(1938)頃に、ラジオが入ってきたようです。

三川地区には、ラジオの普及啓発パンフレット『ラジオのおすゝめ』が残されていました。表紙には、「揃って国防 挙ってラジオ」と標語が書かれています。ラジオは挙国一致で戦争を遂行する上での必需品として売り出されていました。

ラジオは昭和16年(1941)の米・英への宣戦の大本営発表から、昭和20年(1945)8月15日の玉音放送まで、虚実を織り交ぜながら戦況を伝えました。



兵士の出迎え・見送り

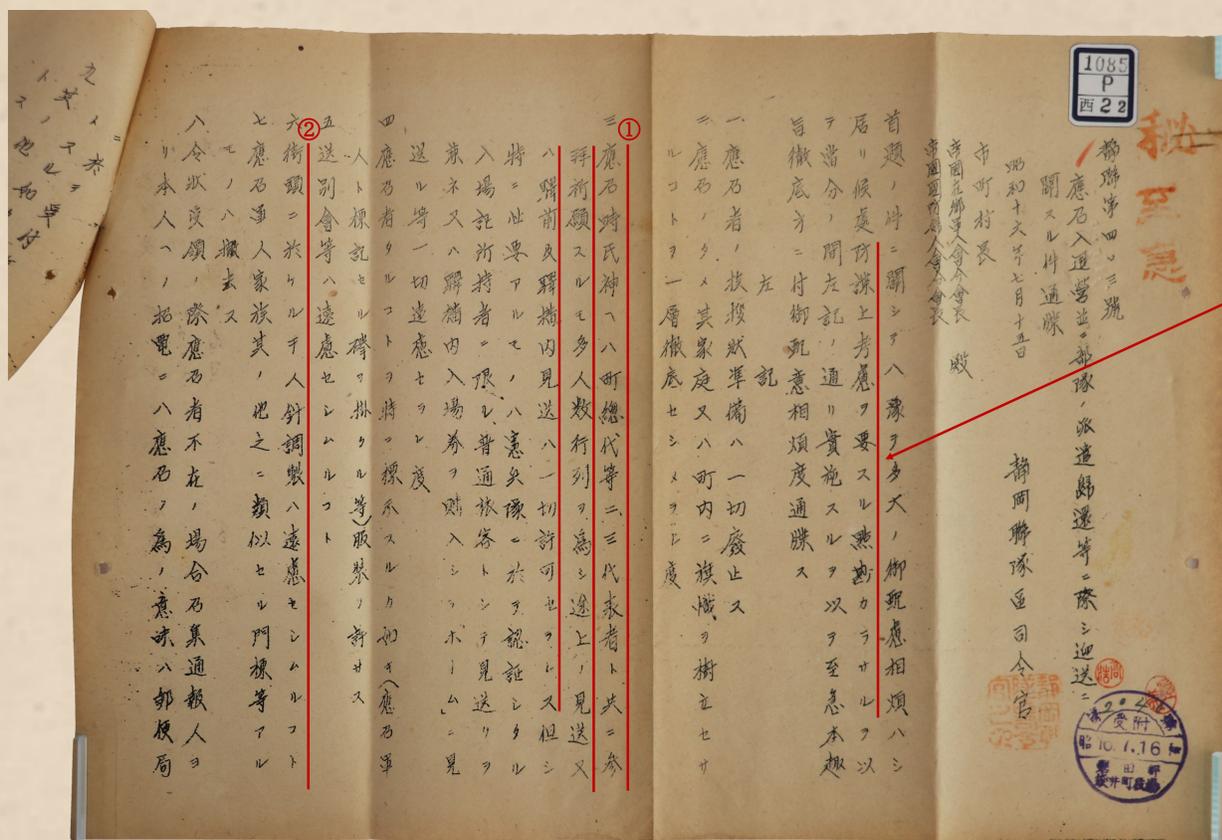


日中戦争以降、兵の召集が大規模に行われるようになり、村民が入隊した際や除隊した際には、駅のホームで見送り・出迎えが行われました。

昭和初期の上浅羽村では、八幡神社で壮行会を行った後、中遠鉄道(のちの静岡鉄道駿遠線)の芝停車場のホームで見送りが行われていました。

また、昭和16年(1941)の国鉄(現JR)袋井駅では、ホームの混雑により入場が規制されるほど、盛大に見送り・出迎えが行われていました。

日中戦争が本格化すると、極秘動員も行われるようになり、ホームでの見送り・出迎えは、敵による諜報活動防止上の観点から自粛が呼びかけられました。



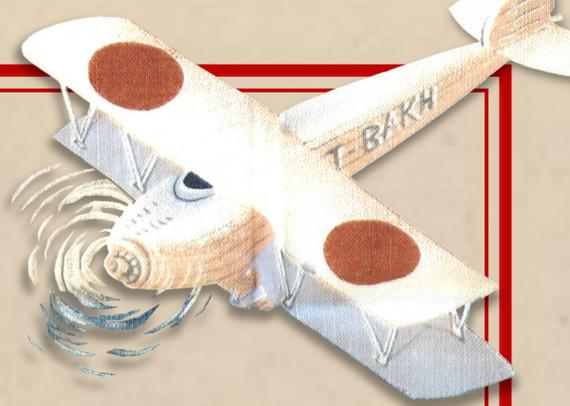
「防諜上考慮ヲ要スル点少カラサル」

- ① 応召時氏神へ八町総代等二、三代表ト共ニ参拝祈願スルモ多人数行列ヲ為シ、途上ノ見送又ハ駅前及駅構内見送ハ一切許可セラレス。
- ② 街頭ニ於ケル千人針調製ハ遠慮セシムルコト。

▲ 昭和16年7月15日付け「静聯第四〇三号 応召入退營並ニ部隊ノ派遣帰還等ニ際シ迎送ニ関スル件通牒」(袋井町近代役場文書②1085) ※一部加工(数字・下線)

届かなかった通知

—1944年東南海地震—



昭和19年(1944)12月7日午後1時36分、紀伊半島東部の熊野灘でマグニチュード7.9の東南海地震が発生。東海地方を震度5以上の強震が襲い、袋井市域では177人が犠牲になりました。

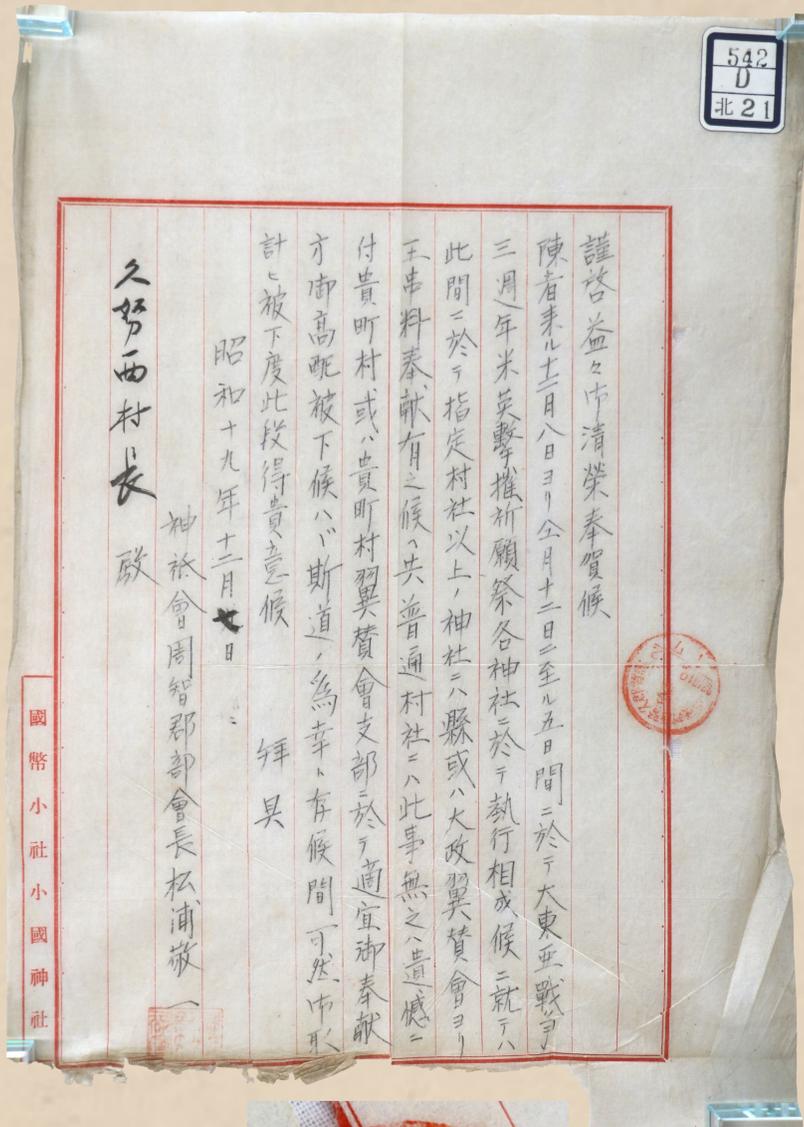
翌日の12月8日は、米・英への宣戦布告から3周年を迎える日であり、各地の神社で戦勝の祈願祭が行われる予定でした。

東南海地震当日の12月7日付けで小國神社(森町)から久努西村に出された通知には、12月8日から12日までの5日間、祈願祭を行うことが記されています。

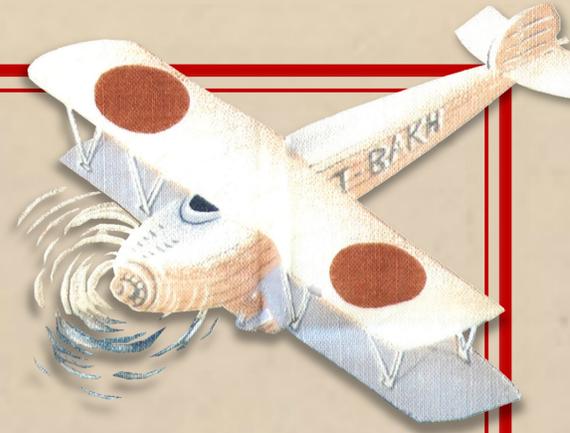
注目すべきは、通知に12月17日付けの受付印が見えることです。村役場に通知が届いた頃には、既に祈願祭は終わっていたことになり、地震の影響が考えられます。

戦時下に発生した大地震を象徴する史料の一つです。

▶ 昭和19年(1944)12月7日付け〔大東亜戦争三週年米英撃摧祈願祭玉串奉獻につき〕(上)と受付印の拡大(下)



高尾陸橋の弾痕



昭和20年(1945)、アジア・太平洋戦争の末期になると、袋井市域への空襲も激化していきました。

同年5月18日の午前10時30分頃、アメリカ軍の艦載機が袋井上空に飛来しました。艦載機は、空襲に備えて袋井駅の東側の切り通しに退避していた国鉄の車両を狙い、急降下して機銃掃射を行いました。

この時の弾丸は、車両内にいた乗客にも被害を与えました。また、線路にかかる高尾陸橋(跨線道路橋)の東側の側板を貫き、9か所に弾痕を残しました。

平成20年(2008)、老朽化にともない、橋は新しく架け替えられましたが、旧橋の弾痕は新しい橋のたもとに保存・展示され、戦争の痕跡を今に伝えています。



◀ 架け替え前の高尾陸橋(撮影:平成20年)

▼ 現在の高尾陸橋と、そのたもとに展示されている旧橋の一部

